

連載

# ニワトリの獣医師と呼ばれてたくて 3

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

## タマゴ生産工場か？ ウィンドウレス鶏舎

何とも言えない挫折感や不安、再チャレンジの道が首の皮一枚つながつたという安堵感が複雑に入り混じって、高校の卒業式を迎えたことを今でも鮮明に記憶している。

成績優秀な連中が偶然揃っていたサッカー部の同輩や後輩に顔を合わせたことなく、逃げるように校門を出たのであった。とはいえ、いつまでも落ち込んでいたわけにもいかなかった。気持ちを入れ替えて、新たな生活が始めた。養鶏場の社長のご厚意により、社長宅に下宿させてもらい、週末の三日間は農場でアルバイト。残りの日は、受験勉強というサイクルの生活がスタートした。

今振り返ると、この生活は、父親のプレッシャーからある種、解放され、良い社会勉強となったように思う。養鶏場での生活は、これまでも日常的に手伝いをしていたので、大きな苦痛はなかった。

この頃に、高床式鶏舎を経てウィンドウレス鶏舎なる大型のシステム化されたものが登場してきた。読者諸氏の、周知のごとく「ウィンドウ

レス(Window-Less)」という名称の通り、窓がないシステムである。ニワトリは、タマゴを産む際に光線が必要とするため、こうした鶏舎では人工的な照明をしなければならぬ。また、閉鎖環境であるため、強制的な換気が必要となる。この際、温度センサーなどを利用して換気量を調整し、温度管理も併せて行ってしまう。こういったシステム鶏舎を初めて見た時は、かなり驚いた。

ウィンドウレス鶏舎の登場によって、農場での仕事(作業)が大きく様変わりした。これまでの日常的なトリ飼いの仕事といえば、給餌、餌ならし、死亡鶏出し、鶏糞出しといったものだ。ところが、ウィンドウレス鶏舎(高床式でも同様だが)では、死亡鶏こそ自動的に取り出せないものの、給餌、餌ならし、鶏糞出しといった作業は、たいていスイッチ一つで実施されてしまう。人が行う作業は、機械作動が正常か否かの確認作業ということになる。

しかし、当時としては「こちとら、長年『青空鶏舎』から農場を見てい

るのだ。何から何まで機械任せで何がいいんだ!!」といった気分が付きまとったものであった。もともと、こうした作業こそ人にしかできない重要なものであることは、機械化されたシステムを前提として生産現場でコンサルテーションする今日では肌で感じる事ができる。

これが革命的变化であったことは、その後の日常管理に携わって直ちに実感できた。例えば、配餌車で給餌していた頃は、早朝(五時頃から六時)から給餌するのが常だった(少なくとも父はそうしていた)。

『ニワトリは、午前中それも十時から十一時に集中してタマゴを産むから、それに合わせて餌を充分に与える必要があったからなのだろうか? あるいは、早朝に給餌すると産卵率が良くなるのか?』

子供だった当時は、あまり深く考えていなかったが、給餌が自動化されたとき、改めてこうしたことを考えさせられた。とにかく、朝一番の重要で大変な仕事の一つだった給餌は、タイマーセットですべて解決してしまう。時間が来たら、自動的に給餌してくれるだけでなく、給餌する量を細かく指定もできることを知

って、産業の変革の与える影響の大きさを実感したものであった。良くも悪くも、農場での仕事は生

## タマゴ工場か? 「GPセンター」

「自分たちで作ったタマゴは、自分たちで売る」という考えのもとに、GPセンターが農場に併設されたのも、筆者が農場でアルバイトしていた少し前の頃からだと記憶している。それまでタマゴはどう処理されていたのかは、採卵養鶏業をシステムとして理解していなかった筆者にとっては定かでない。

「GPセンターって、なんだ?」とアルバイト中に問い掛けた筆者。

「要するに、タマゴを各サイズに選別してパックすることだよ」とは農場の人々の答え。

「そんなこと、工場内を見れば説明されなくてもわかるよ。GPって何の略なの?」

「……」

結局、農場内の問答では埒があかず、「グレーディング(G)とパックング(P)の意味だよ」と、社長が最後に教えて下さった。こうした初歩

き物相手の肉体労働という性格から機械のメンテナンスという技術を要求される業務に様変わりした。

的な事柄も、お手伝い以上の意識のない筆者にとっては目新しい情報であった。

余談だが、筆者は初めて渡米するまで、米国でも同様に呼ぶものだと思いこんでいた。しかし、向こうでは「エッグ・プロセッシング・プラント」と呼ばれていることを知った。野球でいえば、ナイターとナイトゲームみたいな日本語と英語の関係かと思ひ、妙に納得してしまった。

筆者のアルバイトの中で、一番大変だったのがこのGPセンターでの作業であった。GPセンターで要求されるのは農場での動きとは全く異なる。すなわち、農場では二ワトリが相手のいわば自然に合わせた作業であるのに、GPでは人相手の作業となる。スーパー、問屋、究極を言えば消費者の意向が相手なのだ。この流れをいかにうまく調整するか、最重要なテーマであった。これはいわば永遠の課題ともいえる。

人の欲求は、人の生活パターンによって変化する。だから休日である土曜日や日曜日にタマゴが沢山欲しい。一方、当然のことながら、二ワトリは都合よく産んだり産まなかつたりすることはできない。ましてや、LやMサイズばかりが産卵されるわけではない(近頃は嗜好が変わって二サイズはM・MSが中心かな)。

加えてオーダーを出す側も、消費者の意向をできるだけ読みたいためなのか、約束の時間通りには注文がなかなか届かない。しかし、オーダーが遅れる割にはパックしたタマゴをスーパーの配送所に納品する時間を待つてはくれない。

そんなわけで、始めたばかりのGPセンターでは、注文数をクリ

アするために夜中まで仕事することは日常茶飯事であった。主婦が主であるパート従業員は終業時には帰るのが基本となる。深夜作業となれば、もっぱら筆者の出番なのだ。社長宅で下宿していた筆者は優先的に残業するのは当然のことであるが……。日昼の農場勤務の後であると、これが

## ドクターKと「衝撃」の初対面

勉強の傍ら、週三日の養鶏場でのアルバイトも板についてきたある日、筆者はいつものようにGPセンターで作業をしていた。

そこに、白髪で痩せた男性が自分の庭のように、GPセンター内を歩いている。養鶏場内はもちろん、GPセンター内も部外者は入場禁止なのに、である。筆者は自慢じゃないが、この養鶏場では古株なのだ。筆者の知らない人間がわが物顔で領域を荒らすのは不愉快千万。これはオスの本能なのか……!!

「あのヒト、誰ですか?」  
と筆者は少々いきり立って社長に尋ねた。  
「ドクターKだよ。知らないのか? 嘘だろ?」

結構きつい。機械が不調であったりすると、作業はウマの小便(おっと失礼)のように長引く。泣きっ面にハチとはこのことか。  
今日では随分改善されたように聞か、こういった風景はまだ多くのGPセンターであるらしい。

### 「初めてお会いしました」

「そうか、あの人が担当したのか?」

社長は、筆者の父が担当していた育雛・育成場もドクターKに鶏病コントロールを依頼しておられたので、当然、そこで育った筆者がドクターKを知っていると思っていたのだ。そして、その日の夕食時、社長宅で初めてドクターKとお話をした。試験に失敗した時に電話で会話して以来だ。筆者は、緊張してあいさつをすると、非常に温かみのある表情で微笑んで下さった。  
しばらくの談笑のうちに、「ロボットの三原則は知っている?」との全く予想もしない、突拍子もないドクターKの問いかけに、  
「知りません」

筆者は面食らって答えた。

「このヒト、獣医師なんだろ。なんでロボットの話なんだヨ! 普通は、鶏病の話だろ」

筆者の頭の中は一杯になってしまったのだ。

ちなみに、アイザックアシモフのロボットの三原則とは――

(1)ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危害を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

(2)ロボットは、人間に与えられた命令に服従しなくてはならない。ただし、与えられた命令が、第一条に反する場合はこの限りではない。

(3)ロボットは、第一条および第二条に反する恐れのない限り、自己を守らなければならない……であることは後に調べてわかった。

トリと全く結びつかないと思われるロボットが、なぜ話題に出てくるのであろうか。あるいは、天才と何とかは紙一重なのであろうかなどと、一瞬のうちに頭を思い巡らしながらも、筆者はドクターKとの出会いに「衝撃」を感じた。

この時、ドクターKが何故このよな話をされたのかは、後にゆっくりと会話する機会を得てご教示いただいた。

今日、現実にホンダ技研が試作したアシモ(これは例のアシモフという作家の名前にちなんだ名称と聞く)というロボットはかなりの精度で動くことが可能である。最近のロボット工学の進歩を見ると、この時されたドクターKのお話のように、ロボットがごく当たり前の世界が来るのだろうか?

そうなると、養鶏場もいずれロボットが管理する時代が来るのだろうか? ロボットが氾濫したら人間はどうなるのであろうか? といったようなことをこの頃考えさせられることが多い。十五、六年も前に、こうした時代の答えを見つけておられたドクターKはやはり天才なのか? あるいは……

現実にGPセンターではロボット的な要素を持ったマシンが普及している。単調な作業を忠実にこなすことに限っては、人間はロボットにかなうはずがない。

しかるに、程度の差はあれ、多くの人間は決められたことを一分一厘違わず忠実に実行できないのが常である。しかし、養鶏の分野では、生

き物を扱うが故に、アナログの感覚が必要な領域は必然である。

アナログ感覚の大切さをやっと思感できるようになってきた筆者は、ドクターKのこの時の話がある意味で未来を予言したものかもしれない

## そして一年が過ぎた

勉強プラス養鶏場でのアルバイトという生活を一年続けた後に、幸運にも筆者は獣医師のタマゴになることができた。振り返ると、この一年間の経験はいろいろな意味で有益なものであったと痛感している。

筆者にとっては、養鶏場の社長宅に下宿した経験は『他人の飯を食った』ということになり、非常に良い社会勉強になった。特に、家賃・光熱費を除いた生活費のすべてを養鶏場でのアルバイトによって稼ぎ出さねばならない環境に身を置けたことは、大いに筆者のハングリー精神を育てるに役立ったと振り返る。(もともと、後の大学時代は、さらにハードな環境であったが……)

近頃、『パラサイトシングル』という言葉をよく耳にする。ちなみにパラサイトとは寄生あるいは寄生虫の

つたのだと思うと、改めてその人となりと感性に感服させられるとともに、次の時代への移行をうまく行えなかったときを想像してゾッとするのである。

ことで、親元を離れないで金銭的な援助を受けつつ(親に寄生し)、かつ、精神的にも物質的にも独立できない(結婚できない)若者のことをいう。

日本では、筆者の同世代の若者を含めて、このように無気力で、かつ目標をもたないで目の前のことさえ良ければそれで満足する若者が増加している。このような人たちは、将来はロボットにその役割を奪われてしまうのかもしれない。

日本の将来を危惧する声が聞こえる中で、当時真つ暗だと感じたトネル(環境)は、実は筆者にとっては『獣医師のタマゴ』になるまでの良質なインキュベーター(孵卵器)だったのだ。

(筆者・株ピーピーキューシー品質管理&生産管理部門長/獣医学博士/獣医師)